

関西大学東西学術研究所創立六十周年記念論文集抜刷

## 嚴復と訳語：科学

沈 国 威



# 嚴復と訳語：科学

沈 国 威

## 一、はじめに：概念から訳語へ

我々の言語が外来の新概念を受容するには、概して二つの方法がある。即ち「訳」と「借」である。「訳は移すことなり」、即ち自言語の意義のある言語成分を用い、ソース言語の概念を自言語の中に移し入れることである。その方法はまた二つあり、一つは既存の語を用いて「訳出する」、もう一つは、新たに訳語を作り「対訳する」方法である。前者は次のような前提を含意している：人類は共通した意味体系、即ち意味の「原風景」を持っている、或いはかつて持っていた。この前提を否定し、本当の「訳」はありえないと主張する人もいれば、また、例えば嚴復のようにこの前提を極限にまで拡大させ、中国古代の典籍から西洋の概念と完全に対応している語を見つけ出すことができると考える人もいる<sup>(1)</sup>。筆者は、言語の語彙体系は大きな柔軟性を持っており、自己調節、自己完結することができると考えている。理論上、完全に等値的な翻訳はないかもしれないが、人物の交流が増えるにつれて、人類は最大の近似値を見つけ出すことができるであろう。そうでなければ、異なる言語、さらには異なる方言を使用する人々は、永遠に誤解の中を生きなければならないことになり、これはまた事実ではない。一方、人類は意味の「原風景」を持っている、或いはかつて持っていたとする主張も、全面的に受け入れることはできない。意味体系の構築と言語文化は密接な関係があり、異なる言語を話す人々は異なった方法で世界を切りとり、世の中の森羅万象を命名している。そして概念の名称としての「語」は孤立したものではなく、その言語の中の他の語と様々な関係を持ち、意味のネットワークを織り成している。いかなる語の発生や消滅、或いは意味用法の変化も、当該語彙体系における同一の意味の場にある他の語に変動を引き起こすことになる。

嚴復は近代中国の有名な翻訳家であり、訳語の創出において並々ならぬ努力を払っていた。普通の語に対して、嚴復は「但求名之可言。而人有以喻足矣（訳語があり、人々がそれを分かればことが足りる）」と言い、また「若既已得之、則自有法想。在己能達、在人能喻、足矣、不能避不通之譏也（もしすでに訳語があれば何とかなる。自分において意味を伝えることができ、他人においてその意味を理解することができれば十分だ。[訳語が] 通じないと言われても甘んじて非

難を受け入れる)」と述べている<sup>(2)</sup>。しかし、重要な語句、つまり時代のキーワードについて、嚴復は「盖翻艱大名義，常須沿流討源，取西字最古太初之義而思之，又当広搜一切引伸之意，而後回觀中文，考其相類，則往往有得，且一合而不易離。（重要な語を翻訳する場合、常にその源流を求めなければならない。西洋の言葉の最も古い意味を考え、その派生的な意味まで広く確認した上、中国語を顧み、同類のものを探索する。そうすれば、往々にして得るものがあり、而も一旦対訳関係が成立すれば確固たるものになる）」と述べている<sup>(3)</sup>。例えば「自由、権利、経済」など後者に属するものについて、嚴復は極めて丹念に訳語を探し求めている。但し、同じく重要な時代のキーワード science については、嚴復は少しも気にかけないかのようにであった。翻訳家であった嚴復は、同時に偉大な啓蒙家でもあった。そして、近代の啓蒙運動にとって最も重要な概念の一つに SCIENCE がある<sup>(4)</sup>。では、19世紀末から20世紀初頭に活躍した嚴復は、どのように SCIENCE を理解し、その真髓を中国語で表出しようとしたのか、またどのような考え方で後に science の訳語として定着した「科学」を使ったのかは、大変興味深い問題である。本論文は『嚴復集』に収められている嚴復の著作と嚴復の初期の翻訳書を考察の対象とし<sup>(5)</sup>、嚴復が用いた「科学」及びその関連概念を表現する言葉を整理しておきたい。このような試みを通じて、我々は或いは嚴復の科学観について、新たな示唆を得ることができるともかもしれない。

## 二、訳語「科学」の誕生：創出と共有

日本では、西洋の新知識が入ってきたのは、18世紀中葉に興った蘭学が最初であった。蘭学者たちは「窮理」など中国の伝統的な語を用いて西洋の新知識を表現したが、中国と西洋との間の知識の体系性と方法論上の大きな差異をすでに痛感していたのである。例えば、宇田川榕庵は、『植学啓原』（1834）の巻頭で「西聖立三科之学。曰辨物也。曰窮理也。曰舍密也。以綜錯万物。貫之於一。……故学者。必先修辨物之学。類其形質。征其異同。次之以窮理。而窮動何以飛走。植何以榮枯之理。又次之以舍密。而離合万物所以資生之元。……辨物者。乃理学之入門也。舍辨物而遽事窮理。……而窮理舍密之階梯也。医学属于窮理之門。故西洋取医於理科。凡為医者。必先進於辨物之学。以研討内景藥物。而後通於窮理舍密之奧旨」と述べており<sup>(6)</sup>、「躬試親驗」こそが、真の窮理の学であると指摘している。明治時に入ってから、日本は人文科学を含む西洋の新知識を全面的に導入しはじめた。明治三年末（1870）、西周は私塾育英舎で『百学連環』と題する講義を行い、系統的に西洋の知識体系を紹介した。西周はまず総論部分で、西洋は「百般学科、枚挙にいとまがない」と指摘し、あらゆる「学科」はみなそれぞれの「学域」があり、學術の精微探究はすべて学者に頼り、学者はそれぞれの学

科を専門とする専門家であり、専門家は「学域」を固守し、その範囲を一步も越えることはない。そして、漢学には経史などの区別はあるが、学域は存在しないと述べている。続いて西周はウィリアム・ローワン・ハミルトン (Sir. W. R. Hamilton) の言葉を引用し、「学」と「術」(science and art) の意義と区別について、論じた<sup>(7)</sup>。『百学連環』の総論部分の内容は後に『知説』と題して『明六雑誌』に連載された。『知説 (三)』の中で、西周は次のように述べている。

ゆえにいわゆる學術なるもの、四大の州、往昔よりすでに有るにあらざるなし。しかれどもこれを今日欧州のいわゆる學術に比するに、あにただ霄壤のみならんや。けだしそのいわゆる學術の盛なりとするものは、一学一術のその精微を悉し、蘊奥を極むるをいうにあらず。衆学諸術、あい結構組織して集めてもって大成するものをいうなり。これこの地球上、前古より絶て無うして、はじめ彼の紀元千八百年代の今に見るものなり<sup>(8)</sup>。

続いて西周は、再び「學術」という二文字の意義を説明し、次のように指摘している。「学」はただ知性に根ざし、「観門」に属する。即ち真理を観察し、思索を行う部門である。「術」は既存の理に従い、「行門」に属する。即ち実践を行う部門である。二者の順序は「学」が先で、「術」が後である。西周は、「学」の根本は研究 (investigation) にあり、その方法は数種類あるが、西洋では最近流行っている方法は三つあり、いわゆる視察 (observation, 『百学連環』では「実験」)、経験 (experience, 『百学連環』では「試験」)、試験 (proof) である。この三つの方法のうち、場合によっては、「試験」が省略することもあるが、前二者を省いてはいけない。省いたときは、もはや「研究」と呼ぶことができないであろうと指摘している。さらに『知説 (四)』の中で、西周は最も重要な研究方法は演繹 (deduction) と帰納 (induction) であると主張し、次のように述べている。

かくのごとくして、事実を一貫の真理に帰納し、またこの真理を序で、前後本末を掲げ、著わして一の模範となしたるものを学 (サイエンス) という。すでに学によりて真理瞭然たる時は、これを活用して人間万般の事物に便ならしむるを術と云ふ。故に学の趣旨は、唯専ら真理を講求するに在て、其真理の人間に於ける利害得失の如何たるを論ず可らざるなり。術は則ち其真理の在る所に随ひ活用して吾人の為に害を去り利に就き失に背して得に向はしむる者なり (云云)。故に学は人の性に於て能く其智を開き、術はの性に於て能く其能を増すものなり。

然るに如此く学と術とは其旨趣を異にすと雖ども、然ども所謂科学に至ては、両者相混じて判然区別す可らざる者あり。譬へば化学 (chemistry) の如

し。大要分解法 (analytical chemistry、現在分析化学と訳す。引用者、以下同) の化学は之を学と謂ふべく、総会法 (synthetical chemistry、現在合成化学と訳す) の化学は之を術と謂ふべしと雖ども、亦判然相分つ可らざる者あるが如し<sup>(9)</sup>。

西周は引き続き、欧州の学術の盛況は古今を超えたが、その総合統一した観点はいまだ定論がない。コントは諸学の順序を、単純なものから組織のあるものまで述べ、五学の規範を立てたと補足した<sup>(10)</sup>。コントの五学とその順序は、天文学、物理学、化学、生理学、社会学であり、西周が『百学連環』で言及している学科のほうはずっと複雑であった<sup>(11)</sup>。文字列「科学」はまさにこのような文脈の中で初めて出現した。ここでの「科学」はかつてscienceの訳語の初出例とされ、よって西周もscienceの訳語の創出者となったのである<sup>(12)</sup>。しかし、現在日本の学界では一般にここで使用されている「科学」はscienceの意味ではなく、subject或いはdisciplineの意味であると考えられている<sup>(13)</sup>。つまり文中の「科学」はおそらく「学科」の間違いであり、後者は西周が『百学連環』の中で何度も使用しているタームである。この結論が導き出されたゆえんは、前後の文脈に対する理解のほか、もう一つの重要な理由がある。それはこの出典の後しばらくの間、西周は自分の著書で「科学」という語を使用していなかったことである。もちろん、我々は次のような推測をすることもできよう。つまり西周本来の意図は「学」をscienceの訳語に用い、「術」をartの訳語に使い、「科学」をそれまでの著述で使用していた「学科」の代わりにsubject或いはdisciplineの訳語に用いて、「一科の学」「専科の学」或いは「分科の学」の意味を表現しようとしたのである。

西周とほぼ同時期に、中村正直(敬字)も『明六雑誌』に訳文を連載し、西洋の知識体系と学問の方法を紹介した。中村は次のように書いている。

希臘、羅馬の盛んなりしとき、学士、文人多く世に出て著書多かりけるが、このときいまだ印板の書なかりしゆえ、後世に至り存するもの、はなはだ少し。しかれども、その残闕の中に真理(トルス)および学術(サインス)の散見すること星火のごとく、後世に至りその火蔓延して至大至明の火となりけり<sup>(14)</sup>。

中村は訳文の中で、「学術」という語を使用し、scienceの発音を記した。中村は訳文の後のコメントで西洋人の言い方によると、学問はおおまかに二つに分類される。即ち形而上学と形而下学の二種類である。文法学、議論学(即ち論理学。筆者、以下同)、上帝道之学(宗教学)、人道之学(倫理学)、律法学、政事学などは形而上学に属し、格物学(物理学)、百工諸術之学、分離学(化学)、医学、

農学などは形而下学に属すると述べている<sup>(15)</sup>。西周が言及した学科の内容及びその順序は、中村において形上、形下の別に変わった。言うまでもなく、ここに優劣の価値判断も含まれている。

ターム「科学」の初出は、このように偶然の出来事ではあったが、西洋の学術体系の全面的導入に伴い、scienceが有する意味内容を表す新しい訳語の出現はもはや時間の問題である<sup>(16)</sup>。『知説』発表三年後の1877年、西周は『学問ハ淵源ヲ深クスルニ在ルノ論』と題して東京大学で行った講演の中で次のように述べている。

其一ハ即チ論題ナル学問ノ淵源ヲ深ウスルニテ、固ヨリ時勢ノ要スル所ナレハ、急需ニ応シ、捷徑ヲ取ル等ノ事モ、今日兎（免？）ル可ラサル事ナリトハ雖モ、総テ学問ニ従事スル以上ハ、ナルタケ直接ニ當世ノ事ニ拘ハラスモ、各其科学ノ深遠ナル理ヲ極メ、無用ノ事ニ類スルモ、理ヲ講明スル為ニハ徹底ノ見解ヲ要シ、特別ノ衆理ヲ聚メテ一貫ノ元理ニ帰スル如ク、所謂江海ノ浸、膏澤ノ潤ノ如ク、左右其源ニ逢フノ地ニ至ルヘキナリ、カノ天文家トナリテ霧点ヲ究メ、本草家ニテ紅雪ヤ醇草ヲ極メ、虫学ニテ水虫ヲ極メ、古体学ニテ古世界ノ禽獸、虫魚ヲ究ムルカ如キ、物理上ノ諸学術ニテ其精微ヲ悉クスノミナラス、又心理上ノ学術ニテモ、道德ヲ説キ、法律ヲ論スルモ其本源ハ人性マテ遡リテ、其淵源ヲ究メタキ者ナリ、<sup>(17)</sup>

演題にある「学問」がscienceに対応していることは疑う余地はない。また、文中の「科学」は「各個」の修飾を受け、scienceを構成するあらゆる学科を意味することが確認できる。いかにして新しい学問を治めるかを探究することを主旨とするこの講演は、西周の「百科諸学」と哲学の関係についての思索を反映しているものである。そして二年後、中村正直は訳稿の中で次のように書いている。

所謂科学（学問）ナル者ハ如何ナル元素ヲ以テ成リ立ツモノナルヤヲ熟知セザルベカラズ、試ニ其何等ノ事ナルヲ問ハズ宇宙間万物ノ現象（phenomena）ヲ看ヨ、之レニ就キ勢力（force）ガ或ル天則ニ従ヒテ其作用ヲナシ居ル事ヲ推究シ得ラルレバ其現象ハ科学的ニ論述シ得ベキモノトス、史学ニ於テモ亦然リ、（略）<sup>(18)</sup>

文中の「科学」と「学問」にはscienceの発音が付けられている。これは「科学」が初めて明確な形でscienceの訳語として使用されている例である。また「科学的」という形容詞的な用法も現れた<sup>(19)</sup>。つまり「科学」の意味は、学科の構成だけに限定されるのではなく、科学の科学たるゆえんの方法論の側面にまで意味用

法を拡大させたことを表している<sup>(20)</sup>。1881年に出版された『哲学字彙』では「科学 = science」の対訳関係が明確に確立されている。これ以降、「科学」は次第に日本社会に受け入れられるようになり、scienceの標準的な訳語となった<sup>(21)</sup>。

明治二十年代に入り、「科学」は日本社会において流行語の様相を呈していたが、「科学」の意味は下記の辞書等の語釈を見ても分かるように、まだ自然科学に偏っているのである。

- 『日本大辞書』(1893)：科学、理学の別名。
- 『帝国大辞典』(1896)：万物にはすべて法則があり、これにより行う研究の学問の一切を科学と呼ぶ。哲学と相對していう、科学は形而下の学であり、哲学は形而上の学である。
- 『日本新辞林』(1897)：科学、哲学と相對立する。

辞典類の語釈から当時の日本社会が科学と哲学を対立させて理解する傾向にあることが読み取れる。そして日本の近代哲学と科学の関係について、辻哲夫は次のように指摘している。

日本においては、科学の学問的な方法や理論的認識の本性が、近代科学の受容とともに、もともと科学に内在するものとして理解されたのではなかった。もっぱら役に立つ専門知識を学びとることをめざして、科学が実学・理学として受容されたとき、実は科学の方法論や認識構造までを根源的に把握しうる素地やゆとりはもたなかったのである。その欠を補う意味で、期せずして重要な役割をはたしたのが、近代哲学導入のまさに日本的なゆきであった<sup>(22)</sup>。

次に目を中国に向けてみよう。樊洪業は「格物致知」は長期にわたり中国の士大夫の道德修養の方法であったが、明代中期陽明学派が興るに至って、朱熹が提唱した「窮物理」の努力は完全に放棄されたと指摘している<sup>(23)</sup>。明末、来華したイエズス会士らが伝えた学問の内容について、徐光啓は「略有三種、大者修身事天、小者格物窮理、……」と述べ<sup>(24)</sup>、さらに「格物窮理之学」を神学の「余緒」と見なした<sup>(25)</sup>。19世紀になってから、西洋の学問はプロテスタント宣教師によって再び中国に伝えられ、人々は「格致」「格物」という語を用いてscienceの中の自然科学の部分と呼んだ。ひいてはまた、もっぱら物理化学、或いは単に物理学を指した<sup>(26)</sup>。現代中国語の「科学」という語は日本語から来ているものである。従って中国では誰が、いつ初めて「科学」を使ったのか、意味用法は如何なるものか<sup>(27)</sup>という一連の質問に対する答えは、近代学術史の関心事となった<sup>(28)</sup>。誰が最初に中国語の文献で「科学」という語を使ったのか。樊洪業は前述した論文の中で、この榮譽は康有為に属すると考えているが、朱発建は論文の中で、台湾の



学者の研究によれば、「科学」を使用している康有為の上奏文は後改ざんされた疑いがあり、証拠とすることができないと指摘している。康有為編の『日本書目志』でも「科学」が書名にしか用いられず、初出の使用例にはなりえない<sup>(29)</sup>。つまり、我々はある文字列が存在するかどうかだけではなく、語の意味に対する使用者の把握をも分析しなければならない。朱癸建が最初に「科学」を使用したのは王国維だと主張している<sup>(30)</sup>。王国維は1899年12月（光緒二十五年十一月）刊行の『東洋史要』の序文で次のように書いている。

同学山陰樊君炳清， 訳日本桑原隲藏君之東洋史要。既成刊有日矣。吾師藤田学士乃論述此書之大旨， 而命国維書其端曰， 近世歴史為一科学。故事実之間不可无系統， 抑無論何学， 苟无系統之智識者， 不可謂之科学<sup>(31)</sup>。

藤田豊八と王国維の間で、科学に関してどのような討論が交わされたのかは今となって知る由もないが、確かに言えることは、藤田は彼の弟子に科学の本質は種々の現象と知識との間の体系性であり、歴史学さえもその例外ではないと語ったことである。これはまさしく、中村正直以来の日本の実証主義歴史学の主張である。しかしながら、ただ出典の時期についてのみ論じれば、梁啓超の下記の例のほうが数ヶ月早い。

然則太平洋之未来。於政事商業宗教学術。凡人種増進。及其争奪之事。關係不小。而將為万国民之大戰場。殆不容疑也。及於彼時。則其動機所起。有二个之現象。一曰科学之進歩。二曰列強之均勢是也<sup>(32)</sup>。

但し、我々は、梁啓超のこの文章は日本の刊行物の訳述であり、「科学」という語に対する理解は、藤田豊八の親授を受けた王国維の深さに達することは難しいことを知らなければならない。

20世紀に入ってから、日本書（雑誌を含む）の中国語訳が大量に出版された。それと同時に中国は教育体制の改革を始めたので、「科学」という語の用例は激増し、政府官僚の文章の中まで浸透していった。例えば1902年西郷試策論の第一題は「西国學術 有形上形下之分 其已成科学者 凡江幾 要旨若何 何者最為切用 宜審其先後緩急之序 以資採択而収実効策」であり、また張之洞らが制定した『学務綱要』の中には「凡教員科学講義， 学生科学問答， 於文辞之間不得涉於鄙俚粗率」という使用例がある<sup>(33)</sup>。この例における「科学」の意味は「分科之学」である。しかし、「中体西用」を鼓吹する張之洞は、中国はSCIENCEが体現する西洋の学術体系、即ち学科システムを導入すると同時に、またSCIENCEを成立せしめる、中国の伝統と全く異なる学問の方法や、「鄙俚粗率」と評される学

術用語等も受け入れなければならないことを認識していなかった。巖復はまさにこの時代にいわゆる「科学」の問題に直面したのである。

### 三、巖復におけるSCIENCE（科学）

巖復の子息は、巖復の知識のバックグラウンドについて次のように述べている。福建省侯官の田舎の漢方医家庭に生まれた巖復が、福州馬尾造船所付属船政学堂—馬江学堂に合格したのは、1866年、14歳のことであった。翌年正式に入学し、「英語、数学、幾何、代数、解析幾何、割錐、平三角、弧三角、微積分、動静力学、水力学、電磁学、光学、音学、熱学、化学、地質学、天文学、航海術を学んだ」<sup>(34)</sup>。卒業後、海軍に奉職した巖復は、1875年に英国に派遣され、1876年にグリニッジ海軍大学に入学して、「高等数学、格致（物理・化学）、海軍戦術、海戦、公法、海軍砲台建築の諸学術を習得」した<sup>(35)</sup>。巖復は1879年に帰国し、英国滞在は二年余りであった。巖復は、福州船政学堂、煙台海軍学校で教鞭を執った後、1880年に天津水師学堂に転任して総教習（教務長）となり、1890年に学堂総弁に昇進した。以上のような学歴、職歴から見て、巖復は典型的な技術官僚（テクノクラート）だといえる。しかし、彼は技術方面での翻訳著作を後世に残さなかった。一方、巖復は、英国留学中にすでに人文科学に対して非常に興味を示した<sup>(36)</sup>。このことから、巖復が船政学堂に入ってから英国留学まで受けたのは、西洋の科学教育であり、自然科学からスタートし、続いて幅広く人文科学を渉猟したことが分かる。しかし、指摘すべきは、巖復の知識は英語という言語の中で完成しており、一つの言語からもう一つの言語へ翻訳されるプロセスは存在しないことである。そのため、彼が同胞に対して西洋の知識体系を紹介しようとした時、たちまち言語上の困難に遭遇したのである。以下、巖復が「科学」を使用する前と後との状況についてそれぞれ見てみよう。

巖復は1895年2月4日、5日に天津の『直報』に「論世変之亟」を發表し<sup>(37)</sup>、西洋の強さについてみずからの見解を次のように述べている。

今之称西人者，曰彼善會計而已，又曰彼擅機巧而已。不知吾今茲之所見所聞，如汽機兵械之論，皆其形下之粗迹，即所謂天算格致之最精，亦其能事之見端，而非命脉之所在。其命脉云何？苟扼要而談，不外于學術則黜偽而崇真，于刑政則屈私以為公而已。

即ち、学術は「黜偽而崇真」でなければならない、政治法律は「屈私以為公」でなければならない。その他例えば汽機兵械、天算格致は、全て枝葉末節に過ぎず、「命脈の所在にあらず」とある。一カ月後、巖復は「原強」を發表し<sup>(38)</sup>、引き続

き西洋の強い所以を探究した。文章の中で、嚴復は中国の知識人として初めてダーウィンの進化論を紹介し、これにより「泰西之學術政教，為之一斐變焉」と指摘している。嚴復はまた群学（社会学）を紹介し、これは「大闡人倫之事」の学問であり、群学を学ぶには必ず数学、名学（論理学）、力学（物理学）、質学（化学）を習得しなければならないと述べている。このように数理化等の形而下学は「大闡人倫之事」の形而上学の基礎となった。嚴復はまた、知識を天地人の三種類に分け、「人学為尤急切」と考えている。生理学と心理学を含む人学は、群学を治める必要条件だからである。これらはこの時代の嚴復のSCIENECに対する理解を反映しており、その中にコント学説の影響を見いだすことは難しくない<sup>(39)</sup>。

1895年5月1日から8日、嚴復は再び『直報』に「救亡決論」を連載した<sup>(40)</sup>。これは「原強」に続き、西洋の知識体系を紹介する重要な文章である。文章の中で嚴復は、中国の改革に最も必要なのは、「莫亟于廢八股」と指摘している。教育、学術体系に関する改革について、嚴復は「痛除八股而大講西学」でなければならないと考えている。八股の種々の弊害に痛烈な批判を加えた後、嚴復は「西学格致」は中国の伝統的な学問とは全く正反対なもので、「一理之明，一法之立，必驗之物物事事而皆然，而後定之為不易」、即ち如何なる理論も実験と検証を経なければならないと述べている。文中の「西学格致」は、自然科学を主な内容とする西洋科学のことである。嚴復はさらに、

且西士有言，凡学之事，不僅求知未知，求能不能已也。学測算者，不終身以窺天行也；学化学者，不隨在而驗物質也；講植物者，不必耕桑；講動物者，不必牧畜。其絕大妙用，在于有以鍊智慮而操心思，使習于沈者不至為浮，習于誠者不能為妄。

と述べて、科学の非功利的性質とその人格に対する薰陶養成作用を強調し、科学は完全に中国の「理学」に取って代わることができる」と指摘した。このように嚴復は、「中体西用」を鼓吹する張之洞らとの間に一線を画したのである。

嚴復は「学」の「学」となる所以について、次のように指摘している。

西人举一端而号之曰「学」者，至不苟之事也。必其部居群分，層累枝葉，確乎可証，渙然大同，无一語游移，无一事違反；藏之于心則成理，施之于事則為術；首尾賅備，因応釐然，夫而後得謂之為「学」。

文中の「学」は疑いもなく、西洋の「分科の学」（挙一端而号之曰学）である。嚴復の理解によれば、如何なる知識も「学」にまで高めるには、組織、体系性が必要であり、確実に検証することができる（部居群分，層累枝葉，確乎可証）。ま

た厳密に定義した用語があり、一貫性を備えて、歴然とした因果関係が存在しなければならない（首尾賅備，因応釐然）。このような「学」は理論上探究する対象になるだけでなく、人間社会（即ち後の「公家之用」と「専門之用」）に応用することもできる。

1898年『天演論』が刊行され、序文十八『新反』の中で厳復は次のように書いている。

古之為学也，形氣道德岐而為二，今則合而為一。所講者雖為道德治化形上之言，而其所由徑術，則格物家所用以推証形下者也。撮其大要，可以三言尽焉。始于実測，繼以会通，而終于試験。三者闕一，不名学也。而三者之中，則試験尤為重也<sup>(41)</sup>。

この段落は原書の次のような部分から訳出したものである。

And the business of the moral and political philosopher appears to me to be the ascertainment, by the same method of observation, experiment, and ratiocination, as is practised in other kinds of scientific work, of the course of conduct which will best conduce to that end<sup>(42)</sup>.

即ち、古代では学問が形而上、形而下の二種類に分けられていたが、いまでは一つに統合された。これは形而上学も、形而下学の三大原則に準拠した結果である。厳復は、「実測」、「会通」、「試験」は、科学のいわゆる科学たる所以であり、どれも欠くことはできないが、そのうち「試験尤為重也」と指摘している。英国の聴衆にとって不必要な背景知識は、中国の読者にとっては予備知識として与えておかなければならないため、厳復は原書にはない内容を付け加えざるを得なかったのである。厳復はまた、倫理進化と同情心を論じる序文十四「恕敗」の中に「雖然，学問之事，貴審其真，而無容心於其言之美惡」という原書にない言葉を加えた。即ち、科学の目的は自然の法則（真理）を発見することであり、人類の善悪醜美を審判することではない、という意味である。ハクスリーのこの二つの文章は、科学の問題について特に言及していない（scienceは僅か2例だけ）ので、我々は厳復の科学の問題についての知識はどこから来たのかと問わずにはいられない。

1897年秋『国聞報』の創刊を機に、二年間沈黙した後、厳復は再び新聞への投稿を始めた。1898年9月22、23日、厳復は『国聞報』に「西学門徑功用」を連載した<sup>(43)</sup>。これは厳復が通芸学堂で行った演説文である（9月18日）<sup>(44)</sup>。厳復は本篇の中で西洋の「学」の方法について、前掲『天演論』より更に詳細な説明を

行った。

大抵学以窮理，常分三際。一曰考訂，聚列同類事物而各著其实，二曰貫通，類異觀同，道通為一。考訂或謂之觀察，或謂之演驗。觀察演驗，二者皆考訂之事而異名者。盖即物窮理，有非人力所能變換者，如日星之行，風俗代變之類；有可以人力駕御移易者，如炉火樹畜之類是也。考訂既詳，乃會通之以求其所以然之理，于是大法公例生焉。此大『易』所謂聖人有以見天下之會通以行其典禮，此之典禮，即西人之大法公例也。中西古学，其中窮理之家，其事或善或否，大致僅此兩層。故所得之大法公例，往往多悞，于是近世格致家乃救之以第三層，謂之試驗。試驗愈周，理愈靠实矣，此其大要也。

即ち真理を探索する「学」は、まず客観事物に対して正確な観察（考訂、演驗）を行い、それからそれぞれの特徴に基づいて分類（貫通）しなければならない。この基礎の上で、各種の現象がそうである理由について説明をし、法則性のあるもの（典禮或いは公理）を総括する。中国と西洋の古代の学者は、その業績の大小にかかわらず、大体この二つのことが成し遂げたのみである。「その為、得た公理は往々にして間違いが多い」。近代以降、西洋の学者は「試験」を導入した。即ち「公理」に対し試験を加え、それによって観察と法則化の過程に生じた間違いを正した。これは正に近代科学精神の誕生である。嚴復は中国と西洋の学問の相違は、西洋の学問が「読無字之書」を重要視し、「第二手書」を読むのではなく、観察を出発点とし、実践を重んじて、「古人に騙され」ないことだと指摘している。嚴復は聴衆に次のように訴えた。

而于格物窮理之用，其涂術不過二端。一曰内導、一曰外導。（中略）如化学、力学，如天、地、人、動、植諸学多内導。至于名、数諸学，則多外導。学至外導，則可据已然已知以推未然未知者，此民智最深時也。

「内導」は即ち帰納であり、「外導」は即ち演繹である。演繹法の把握と運用は科学進歩のシンボルである。嚴復はここで再び科学の社会的機能について言及し、科学の非功利性は何よりも重要であると強調して、次のように述べた。

須知学問之事，其用皆二。一、専門之用；二、公家之用。何謂専門之用？如算学則以核数，三角則測量，化学則以製造，電学則以為電工，植物学則以栽種之類，此其用已大矣。然而雖大而未大也，公家之用最大。公家之用者，拳以鍊心製事是也。

「学」に関する巖復の言説は、前述した西周の主張と好対照となり、両者には極めて大きな一致性がある。それぞれの国民に多大なる影響を及ぼした二人の啓蒙家は、30年近くの時間を隔て、科学の神髄を自分の同胞に紹介した。しかも、いずれも science の等価物（訳語）が、いまだ確立し社会に認知されていなかった状況下であった。後述するように、巖復の science に対する理解と認識は、主にアダム・スミスの *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*, 1776（『国富論』）とジョン・スチュアート・ミルの *A System of Logic*, 1843（『論理学体系』）によっている。

#### 四、巖復と「科学」

上述したように、巖復は初期の著作の中では、主に「格物窮理、学、学問、学術、格致」などで science が有する概念を伝えようとした。つまり、巖復は science の意味に対して深く理解していたにもかかわらず、決まった訳語を採用しなかったのである。巖復が「科学」を使用したのは、1895年以降翻訳に着手した『原富』と『穆勒名学』である。特に後者では「科学」は数十例使用されている。翻訳の影響を受け、1900年前後、巖復は自分の著述においても「科学」を用い始めた。『巖復集』の中に「科学」を延べ143例検出することができる。具体的な状況は以下の通りである。

『巖復集』中の「科学」の使用状況一覧

No	題 目	時 期	例数	冊	頁
1	『原富』按語	1897—1900年	3	四	853-921
2	訳斯氏『計学』例言	1901年9月	6	一	97-101
3	『国計学甲部』（残稿）按語	1900年？	1	四	848
4	『穆勒名学』按語	1900—1902年	8	四	1027-1053
5	與張元濟書	1902年2月5日	1	三	550
6	與『外交報』主人書	1902年	16	三	557-565
7	論今日教育應以物理科学為当務之急	1901—1911年	21	二	278-286
8	訳『群学肄言』自序	1903年4月	2	一	123-24
9	『群学肄言』訳余贅語	1903年4月	1	一	125
10	京師大学堂訳書局章程	1903年8月	7	一	127-131
11	政治講義	1906年1月20日	37	五	1241-1316
12	與甥女書	1906年	1	三	833

13	『法意』按語	1900—1909年	5	四	935-1027
14	『普通百科新大詞典』序	1911年	2	二	276-77
15	天演進化論	1913年4月12日—5月2日	2	二	309-319
16	救貧	1913年4月17—18日	1	二	319-322
17	民可使由之不可使知之：講義	1913年9月5—6日	1	二	326-329
18	読経当積極提倡	1913年	2	二	329-333
19	『民約』平議	1914年2月	1	二	333-340
20	與黄君書	1914年	1	三	723
21	『古文辞類纂』評語	1911—1917年	1	四	1201
22	題李一山汝謙所藏唐拓武梁祠画像有序	1918年	1	二	399-40
23	何嗣五赴欧觀戰歸，出其記念冊子索題，為口号五絶句	1918年后	2	二	403-404
24	書示子璿四十韻	1918年后	1	二	409-10
25	『庄子』評語	?	7	四	1104-1150
26	與熊純如書	1916—1920年	3	三	642-710
27	與侯毅書	1918年	3	三	721-722
28	與俞復書	1918年	3	三	725
29	與子女書	1918—1921年	3	三	808-825
	計		143		

上の表は『巖復集』の注釈等を参考に、各文献の執筆時期を確認してから、時間順にソートした結果である。巖復が訳語である「科学」を受け入れ、使用する過程を反映している。ここでは、まずそのうち幾つかの文献の執筆時期について説明を行う。

1. 『原富』の按語：『原富』は1900年に全て脱稿したので、巖復の按語もこれ以前に執筆したはずである。但し、校正段階での語句の調整は排除できない。このような要素を考慮に入れても、按語の用語は1900年前後の状況を反映していると言える。
2. 『国計学甲部』（遺稿）の按語：『巖復集』の編者は「原著および翻訳の時間はいずれも未詳であり、恐らく初期の翻訳である」と指摘している。いわゆる初期とは1896年前後、即ち『天演論』よりも前を指すと思われるが、しかし按語の中に「宗教学、言語学、歴史、哲學家、主観、客観」等の日本の訳語が使用されている。巖復の日本語の知識や日本製訳語に対する態度からすれば、

1896年の可能性は極めて低い。

3. 「論今日教育応以物理科学為当務之急」：『巖復集』の編者は、本篇の執筆時期は1901年から1911年の間で、詳細不明としているが、筆者は、この文章は「與『外交報』主人書」が論じている問題と同じ（いずれも教育問題）であり、同一時期の著述と推測している。また学制改革の歴史や語句の使用状況（例えば文中に使用されている「德育、智育、体育、美術」等の日本製訳語）からみても、本篇の執筆は1903年前後であると概ね確定することができる。
4. 『莊子』の按語：『巖復集』では具体的な時間は記されていないが、文末に「曾克崑癸巳秋福州」の序が付いている。癸巳年は1893か、或いは1953であり、いずれも疑問が残る。巖復が莊子を批評批判したのは1910年以降のことであり、按語の中で何度も「科学」を使用している。この点に我々は留意すべきである。

上記の表から、巖復は主に以下三つの資料群で「科学」を使用したことが分かる。

(一) 巖復は『原富』、『穆勒名学』の按語の中（上記表の文献1-4）で、「科学」を18例使用している。これらの用例は巖復が翻訳する過程において、SCIENECに対する理解と訳語の選択傾向を反映している。

(二) 「與『外交報』主人書」と「論今日教育応以物理科学為当務之急」の中の「科学」。代表的な文献は上記表の5-10で、計40余の用例があり、時間は1903年前後に集中している。

(三) 『政治講義』の中の「科学」。この1906年1月に行われた講義の中で計37例の「科学」が使用されている。1906年前後は巖復がもう一つの「科学」を頻繁に使用していた時期である。

以下に三つの資料群の「科学」についてそれぞれ見てみることにしよう。

#### 1. 『原富』と『穆勒名学』の「科学」

巖氏按語の中の「科学」は、間違いなく翻訳作業での訳語使用の延長と言えよう。そのため、まずこの2冊の訳文部分の「科学」をしてみる。『原富』は現在『国富論』と訳されており、アダム・スミスが1776年に出版した経済学の著書である。スミスは第5篇第3節第2項の「青年教育機構の費用」の中で、小中学校から大学までの経費の来源や学科体系、カリキュラムの編制、教学双方の教育環境等の問題について論じている<sup>(45)</sup>。正にこの多かれ少なかれ経済学の主旨から離れている段落において、scienceの使用例が計27回出現している<sup>(46)</sup>。複数形であったり、artとペアで用いたりしていた<sup>(47)</sup>。以下は主な原文と訳例である：

(1) In its nature, it is arbitrary and discretionary; and the persons who exercise it, neither attending upon the lectures of the teacher themselves, nor perhaps understanding the sciences which it is his business to teach, are seldom capable of



exercising it with judgment.

嚴訳：蓋徒有督責之權，而不知所課者何物。(621頁)

(筆者註：スミスはここで履修選択の管理等について論じているが、嚴復は意識しただけで、scienceに訳語を与えていない<sup>(48)</sup>。)

(2) If in each college, the tutor or teacher, who was to instruct each student in all arts and sciences, should not be voluntarily chosen by the student, but appointed by the head of the college;……

嚴訳：其中課授科学之師常不許学者自択，而必由管学者之所命，(622頁)

(筆者註：これは、嚴復が訳文の中で初めて「科学」という文字列を使用した例である。但しこの「科学」はarts and sciencesの対訳である<sup>(49)</sup>。)

(3) In the universities, the youth neither are taught, nor always can find any proper means of being taught the sciences, which it is the business of those incorporated bodies to teach.

嚴訳：国学所教多専門之科学。(624頁)

(筆者註：sciencesは嚴復が「専門之科学」と訳している<sup>(50)</sup>。)

(4) The parts of education which are commonly taught in universities, it may perhaps be said, are not very well taught. But had it not been for those institutions, they would not have been commonly taught at all; and both the individual and the public would have suffered a good deal from the want of those important parts of education.

嚴訳：至于国学所教之専門科学，得隽者非歷所定年数不可，而所学之能否優劣次之。此二者所以異效也。雖然，国学之制誠不足以言善，而平情論之，使非有国学之設，則科学之廢而勿講者必多，而一国之民智將因是而不進矣。(624頁)

(筆者註：嚴復は「科学」を用いてeducationを訳した<sup>(51)</sup>。)

(5) Different authors gave different systems, both of natural and moral philosophy.

嚴訳：名学之興也，由于形氣道德二科学者所持之宗旨相詭，所由之涂術迥殊。(628頁)

(筆者註：嚴復の「二科学」は形而下学と形而上学を指す。スミスが本書を執筆した時、両者は方法論においてまだ大きな隔たりがあった。<sup>(52)</sup>)

(6) ……and logic, or the science of the general principles of good and bad reasoning, necessarily arose out of the observations which a scrutiny of this kind gave occasion to; though, in its origin, posterior both to physics and to ethics, it was commonly taught, not indeed in all, but in the greater part of the ancient schools of philosophy, previously to either of those sciences.

嚴訳：故名学之興也，後于形氣道德二科之学而始有，而古者教人之序，必使先治

名学，而後從事于形氣道德之科。(629頁)

(筆者註：嚴復は、幾つの学科の成立と教育機関での扱われ方を比較的簡潔に訳出している。<sup>(53)</sup>)

十八世紀70年代当時は、アダム・スミスが使用したscienceのコアの意味は：A particular branch of knowledge or study; a recognized department of learning (OED, Second Edition, 1989) であり、嚴復の「科学」は忠実な対訳とは言えないが、基本的には「分科之学」の意義を表現している。同時にこれも当時の一般的な用法であった。他方において、訳文以外の部分に、嚴復は凡例、按語の中で「科学」を7例使用している。原文の束縛から解かれたこれらの使用例は、もう一つの側面から訳語である「科学」に対する嚴復の理解を反映している。これらの例については、後で考えてみたい。

しかしながら、筆者は嚴復のscienceに対する理解は、アダム・スミスからというよりは、ミルからと言うべきだと考えている。『原富』とほぼ同時に翻訳を開始した『穆勒名学』は、嚴復の科学観の形成に極めて大きな影響を及ぼしている。嚴復は本書の序論第二節の標題：Is logic the art and science of reasoning?を「辨邏輯為学為術」と訳出している<sup>(54)</sup>。訳文の前に、嚴復は長文の按語を付け加え、なぜLogicを「名学」と訳したかという理由を説明した。按語に続く翻訳文は次のようになっている。

俗謂名学為思議之術。近代名学專家（此指魏得利，魏官教言牧長，著『名学』、『語言学』二書）始取前說附益之而為界說曰：名学者，思議之学，而因明其術者也。欧洲数百年来，科学駸駸日臻勝境，独名学沿習陳腐，其進甚微，頗為学人所詬病。独是家所得方之他人為多，其著說風行一時，而時始知重。審其界說之義，以学兼術，蓋必能析思之体，通其層累曲折之致，夫而后能据所以然之理，而著為所当然之法以施于用。其義之善，較然无疑。今夫一思之用，其心境之所呈，心力之所待，與期間不可乱、不可缺之秩序，使非昭晰无疑，將何所基而而立致思之術，詔為慮之方乎？故知方術既行，致知斯在。世之不待学而能者，其術必至淺耳。即有術焉初不本于專科之学，亦以其術所本之学方多，抑非謂其无学也。蓋人事外緣至為繁蹟，往往求一事之能行，必先尽多物之性、致衆理之知而後可。故曰「不学無術」也。

この頗る難解な訳文の原文は次の通りである。

§ 2. Logic has often been called the Art of Reasoning. A writer\* who has done more than any other living person to restore this study to the rank from which it had fallen in the estimation of the cultivated class in our own country, has

adopted the above definition with an amendment; he has defined Logic to be the Science, as well as the Art, of reasoning; meaning, by the former term, the analysis of the mental process which takes place whenever we reason, and by the latter, the rules, grounded on that analysis, for conducting the process correctly. There can be no doubt as to the propriety of the emendation. A right understanding of the mental process itself, of the conditions it depends on, and the steps of which it consists, is the only basis on which a system of rules, fitted for the direction of the process, can possibly be founded. Art necessarily presupposes knowledge; art, in any but its infant state, presupposes scientific knowledge; and if every art does not bear the name of a science, it is only because several sciences are often necessary to form the groundwork of a single art. So complicated are the conditions which govern our practical agency, that to enable one thing to be done, it is often requisite to know the nature and properties of many things. \*Archbishop Whately

両者を比較すると、原文と訳文にはかなり大きな隔たりがあることが分かる<sup>(55)</sup>。ここでは翻訳の問題をさておき、厳復のscienceに対する理解を中心に見ることにする。原書においてart「術」とscience「学」は対立を成す概念であり、かつ「学」は「術」に優っている。その為、これまでずっと「推理の術」と見なされてきたLogicは、イギリスの知識界ではその地位はあまり高くないとミルは述べている。このような状況は、大主教WhatelyがLogicを「推理の術であると同時に、また推理の学でもある」と再定義してから、変化が生じた。このように再定義した理由は、Logicは推理の「学」として、推理する際の心理的プロセスに対し分析を行うからである、同時に、推理のプロセスが正確に行われることを保証するため、一組の規則を用意しておく必要があり、これがLogicが推理の「術」としてのもう一つの側面である。ミルは新たな定義の正確性は疑いの余地がないと考えた。「術」は「学」を前提としており、「学」のサポートのない「術」は必然的に浅薄である。厳復は「不学無術」と軽口まで叩いた<sup>(56)</sup>。では、「術」と「学」の区別はどこにあるのか、「術」は「学」になることはできないのか、或いはどのようにすればなることができるのだろうか<sup>(57)</sup>？観察した現象に対して体系的な規則を打ち立てることは、欠くことのできないプロセスであると考えられている。同時に、いくつかの「術」が「学」と称されない所以は、このような「術」はいくつかの「学」を基礎として成り立っているからである。そして、Logicは他の学科のために学問の方法を提供する一種の「諸学を統率する学」である。これこそが、厳復が急いで名学を中国の読者に紹介しようとする理由である。続いてミルは、

Logic, then, comprises the science of reasoning, as well as an art, founded on that science. But the word Reasoning, again, like most other scientific terms in popular use, abounds in ambiguities.

と述べ、科学における学術用語の重要性を指摘している。この訳文は嚴復が次のように訳出している。

然則名学者，義兼夫術與学者也；乃思之学，本于学而得思之術者也。顧思之一言，自常俗觀之，若至明晰；而以科学之法律繩之，則歧義甚衆。

Scienceは「学」と訳され、scientificは「科学」と訳されている。この段落では、嚴復は文中に注釈を加え、「科学」がどのような内容を包括するかを「格致とは医薬に至るまで全て科学であり、名、数、質、力の四科の学も含まれる」と説明し、またLogicと他の学科の関係、及び知識体系における位置づけを「名学雖其理有以統諸学，而自為一科学」と指摘した。嚴復は文章の最後で「科学理瑩語確，故其律令最嚴」と学術用語の問題にも言及した<sup>(58)</sup>。

序論の第3節以下では、ミルはLogicの性質、他の学科との関係、守備範囲、定義の記述法について論述した。本文の部分（特に（乙）の部分）でミルは帰納と演繹について詳細に説明した。嚴復は「内籀」「外籀」という新造語で上述の二つの概念を訳出し、特に「学」をscienceの訳語に、「術」をartの訳語にそれぞれ当てたことは西周と全く同じだと言うことができる。訳文の中で、嚴復は「他科之学、緒科学、科学之所分治、分科之学、外籀科学、試験科学」などの「科学」と関連のある語句を使用した。ミルが示した西洋のscienceに対する嚴復の理解は、二冊の書物の「凡例」と按語からでも見ることができる。例えば、『原富』の「訳事例言」では、嚴復は次のように指摘している。計学は帰納的な学問に属する。いわゆる帰納的とは、即ち現象を観察し、法則を総括することである。法則を総括することのできない現象は、科学探究の内容となることはできない。科学の目的は自然の法則が「仁義」に合っているかどうかではなく、正しいかどうかを証明することにある。科学は自然の法則に従わなければならない（『原富』7-14頁）。嚴復は按語の中で、各学科が発見した新しい法則は「日常生活に役立つものは無限にある」と指摘している（『原富』624頁）。科学が成り立つ基礎である学術用語の問題について、嚴復は、西洋の学術用語、特に動物、植物、化学、生物、生理、医学などの学科の用語は、たいてい古代ギリシャ語やラテン語から来ている（『原富』626頁）、西洋の学者は往々にして日常生活で用いられている語を捨て、新しく術語を作り、それによって記述の厳密さを求めるが、それはやむを得ないことである（『穆勒名学』35頁）と述べている。中国の場合を見れば、

訓詁の方法は學術用語に対して嚴密な定義を行っておらず、ただ類義語を用いて意味を説明し、古今の意義の違いを解釈しただけである。學術用語の定義がはっきりせず、正確さも保証されていない現状は、科学の発展にとって不利である（『穆勒名学』35頁）。

それでは、嚴復の訳語「科学」はどこから来たのか。1900年前後、中国人の著述の中で、「科学」という使用例はほとんどない。しかし、『清議報』、『訳書彙編』といった、日本語の翻訳文を掲載し、日本語の影響を受けた雑誌では、すでに「科学」の用例があった。嚴復はこれらの刊行物を通して日本製の新語訳語に接した可能性がある。例えば、嚴復は『原富』、『穆勒名学』の中で日本の訳語「哲学」を何度も使用している<sup>(59)</sup>。とはいえ、語形の上では日本語の影響を完全に否定することはできないとしても、嚴復の「科学」は意味の上では日本語とは直接の関係はない。scienceは単数形でも複数形でも可能だが、中国語には性・数・格の形態変化はない。嚴復は「学」と「科学」を用いてそれぞれに、一つの全体、或いは各科の学によって構成された學術体系を表現しようと試みた。つまり嚴復にとって「科学」はまだ緊密に結合した複合語ではなかったのである<sup>(60)</sup>。

## 2. 「與『外交報』主人書」等における「科学」

第二の資料群の「與『外交報』主人書」は、『外交報』第3期（1902年3月4日）に掲載された文章「論中国語言變易之究竟」に対して、嚴復が寄せた反論であり、第9期（1902年5月2日）、第10期（1902年5月12日）に連載された。掲載当時のタイトルは「論教育書」で、「癡壘堂投稿」と署名されている。本文では「科学」が16例使われ、その意味用法は『原富』『穆勒名学』の継承と延長であり、さほど逸脱していない。

その時、教育制度の改革について様々な議論がなされていた。代表的なものに以下のようなものが挙げられる。（甲）中国の学問を体とし、西洋の学問を用とする；（乙）西洋の政治を基本とし、西洋の技術を従属的なものと見る。そして『外交報』に掲載された主張：基礎教育は外国語ではなく、中国語を使用すべきである<sup>(61)</sup>。嚴復は逐一反論を加えており、「科学」という語は（乙）に対する反論の中に現れている。嚴復は、西洋の政治を基本とし、西洋の技術を従属的なものと見る論法は、完全に「本末転倒」であると論じ、「技術」とは何か、つまりは「科学」ではないか、論理学、数学、化学、力学はいずれも「科学」である、これらの「科学」は、無数の「道理法則」を総括し、累積しており、西洋の政治の良いところはこれらの道理法則に基づき築かれていることであると指摘している。更に「西洋の政治はまだ完全にはこれら「科学」の原則に従っていない。そうでなければ、西洋の政治は現在のレベルにとどまてはいないはずだ」というハクスリーの言葉を引用し、中国の政治がますます悪くなり、世界で一席の地を占

めるに足りないのは、「科学」の原則に従わず、その行為が「科学」の道理公理に反している為だと述べている。厳復にしてみれば、一般に形而下学とされている「西洋の技術」が正に「実測、会通、試験」という近代科学の精神を完全に体現しているもので、もし「科学」を西洋の技術とみなせば、「西洋の技術はその政治の基本」であり、その反対ではない。一部の人は或いは西洋の技術は「科学」ではないというかもしれないが、そうであれば西洋の政治、西洋の技術はいずれも「科学」から出ており（すなわち両者はいずれも科学の下位概念である）、あたかも左右の手のように、本来本末の区別には関係がない。ここでは、厳復の「科学」は、実際には狭義と広義の二種類の概念を持っており、前者は論理学を含む形而下の学を指し、後者は形而上と形而下の学を統括した知識体系を意味する。厳復は明らかに狭義において「科学」を使用していた。

同一資料群に属する「論今日教育必以物理科学為当務之急」は、講演原稿（不完全な）であり、時間や場所、聴衆の状況はいずれも不明である<sup>(62)</sup>。この講演原稿の中には、「科学」は計21回出現する（タイトルの一回を含む）。事の起こりは、ある陳という姓の御史が朝廷に上申し、八股文廃止後学堂で教えられている言語、物理、化学などのカリキュラムを廃止すべきである。というのはこれらの内容はどれも学生が卒業後国家を統治する人材になることとは関係がないからだと主張している。厳復は、彼は全く教育が分かっていないと厳しく叱責している。厳復は、人の思惟は「思理」と「感情」の二種類に分けることができ、前者は「正しいかどうか」に基づいて判断するが、後者は「心の感覚」にすぎず、「正しいかどうか」の問題ではないと指摘した。今日の学術用語を用いれば、「理性思惟」と「感情思惟」の別であるが、厳復は「徳育は感情を主管し、知育は思索を主管する」、「そして智育は科学を多く使う」と考えている。厳復の「科学」は自然科学を指し、その目的は「自然の法則」を発見することである。厳復は「自然の法則」という語を作り、それまでに使用した「公理」を取って代わった。厳復はハクスリーの意見に賛意を表し、教育の目的は「心を開き、知識を広める」ことにあり、「教育が適切で、それによって心を開くことは、即ち知識を広める」とし、それでは「限りある学習時間の中で、どの種の科学を用いる」と、上述の目的を達成することができるのだろうかかと厳復は真剣に考えた。厳復は、演繹的な数学と幾何、帰納的な物理、化学、動物、植物の諸学科は、いずれも知識を増やすことができるだけでなく、「心を治め能力を鍛錬する効果」もあるとし、中国の教育問題は、徳育に偏り、体育智育が少なすぎる、美術に偏り、物理が足りない、演繹的なものが多く、帰納的なものが少ないことに起因している。中国の学問は詮索し議論すればよく、種々の事実を求めないため、学問を治めた者は奴隷となるだけだと酷評し、この持病を治療するには、「物理科学」を多く学ぶことであった。これが厳復の処方箋である。厳復のいう「物理科学」は、物理、化学、動物、

植物、天文、地質、生理、心理の学科を含み、今日の自然科学と人文科学の一部に相当する。嚴復は、物理科学は中国の「士民心習」を変えることができるだけでなく、実学を普及させることもでき、国家の富強には欠かせないものであると考えている。この文章の主旨は「與『外交報』主人書」と全く同じである！嚴復はまたいわゆる「科学」は嚴格に定義しなければならない、今日何もかも科学とする傲慢な輩がよく目に付くが、むやみに学問の科目を増してはならないと述べた。嚴復はまた、学科を確立させるには科学的な方法が必要であると主張した。すなわち前述した『救亡決論』の中のあのくだりである。「西人拳一端而号之曰“学”者，至不苟之事也。必其部居群分，層累枝葉，確乎可証，渙然大同，无一語游移，无一事違反；藏之于心測成理，施之于事則為術；首尾駭備，因応釐然，夫而後得謂之為“学”」。1902年から嚴復は、京師大学堂訳書局を担当するようになり、訳書局の規約で、嚴復は基礎課程教科書の翻訳は「応取西国諸科学為学堂所必須肄習者，分門訳訳」と提案している<sup>(63)</sup>。いわゆる「諸科学」とは、嚴復は次のように説明している：

- 照西学通例，分為三科：一曰統挈科学；二曰間立科学；三曰及事科学。
- 統挈科学分名、数兩大宗，盖二学所標公例為万物所莫能外，又其理則鈔衆慮而為言，故称統挈也。
- 間立科学者，以其介于統挈、及事二科之間而有此義也。間科分力、質兩門：力如動、静二力学、水学、火学、声学、光学、電学；質如無機、有機二化学。
- 及事科学者，治天地人物之学也。天有天文，地有地質，有氣候，有輿志，有金石；人有解剖，有体用，有心靈，有種類，有群学，有歴史；物有動物，有植物，有察其生理者，有言其情状者。

上述の分析から、1903年前後、嚴復の「科学」に対する理解は、分科の学、専科の学、学科の意義を持つほか、特にそれらの帰納的性質の強い自然科学と人文科学の学科を指していることが分かる。嚴復が欧米は二百年足らずの間に巨大な進歩を成し遂げたことに言及した際、その原因は「惟格致之功」と言っている<sup>(64)</sup>。ここでいう「格致」はすでに伝統の「格致」の範疇を超越したと言うべきであろう。

### 3. 「政治講義」の中の「科学」

嚴復が集中して「科学」を使用したもう一篇の作品は『政治講義』である<sup>(65)</sup>。これは嚴復が1906年の初めに青年会駱君の要請で行った講義の記録原稿である。講義は8回行われ、「科学」は計37回使用された。主に第一講、即ち総論の部分

である。講義の中で、嚴復はまず冒頭で主旨を次のように「蓋政治一宗，在西国已成科学，科学之事，欲求高遠，必自卑邇。」と説明した。いわゆる「すでに科学となった」とは即ち形而上の学としての政治も形而下の学の基本三原則を受け入れたということである。続いて嚴復は「学」と「術」との違いを「取古人談治之書，以科学正法眼藏觀之，大抵可稱為術，不足稱学。」「学者，即物而窮理，即前所謂知物者也。術者，設事而知方，即前所謂問宜如何也。然不知術之不良，皆由学之不明之故；而学之既明之后，将術之良者自呈」と分析して見せた。ここで嚴復はもう一度「学がなければ、術もありえない（不学無術）」の観点を繰り返して、そして、「此一切科学所以大裨人事也，今吾所講者，乃政治之学，非為政之術，故其涂徑，與古人言治不可混同。」と指摘した。嚴復は、更に動植物学を例に政治学を治める方法を「（一）所察日多，視其不同，区以別之，為之分類，一也；（二）一物之中，析其官体之繁，而各知其功用，二也；（三）觀其演進之階級，而察其反常，知疾痛病敗之情状，三也；（四）見其後果之不同，察其会通，而抽為生理之大例，四也。」と述べた。嚴復は「例えば化学、力学、例えば天、地、人、動、植の諸学」は典型的な帰納的な学科であると考えた。動植物学を例に挙げて政治学の学問研究の方法を説明するというのは、興味深いと言えよう。嚴復はまた「応知科学入手，第一層工夫便是正名。」「我輩所言政治，乃是科学。既云科学，則其中所用字義，必須界線分明，不准糸毫含混。」「夫科学之一名詞，只涵一義，若其二義，則当問此二者果相合否。」「因科学名詞，函義不容兩歧，更不容矛盾。」と学術用語のあるべき姿を指摘した。しかしながら1906年当時は、中国ではまだ学術用語の制定が完成していなかった。そのため嚴復は「講科学，與吾国尋常議論不同，中有難處：一是求名義了晰，截然不紊之難；二是思理層折，非所習慣之難。」と嘆き、「今者不佞與諸公談說科学，而用本国文言，正似製鐘表人，而用中国旧之刀鋸錘鑿，製者之苦，惟个中人方能了然。然只能对付用之，一面修整改良，一面敬謹使用，无他術也。」と声高に訴えた。嚴復は一方では、中国語を用いて「科学」を講義するのは絶対正しいであると主張する一方<sup>(66)</sup>、悲観的に、それを達成するには20年間の歳月が必要であると考えていた<sup>(67)</sup>。講義の中で、嚴復は、政治学は為政の術ではなく、他の科学と同様、政治学も事実に基づいて真理を検証し、社会変化の自然法則を探し出すことが必要である。「政治講義」の中の「科学」は西洋の新たな知識体系における一つの分科であり、方法論、学術用語においてはいずれも中国のこれまでの古い学問とは異なる。嚴復は、政治学の歴史、及び新しい政治学と学問研究の方法を、聴講する若者に伝えようとしたのである。



## 五、終わりに

最後に、嚴復がSCIENCEを認知した過程を振り返ってみよう。「学」と「術」は二つの対立する概念であり、「学」の目的は真理（自然法則：嚴復の用語）に対する追及にある。「術」は「事を運ぶに、その方法を知る」ことであり、実用に偏る。「術」は「学」に昇華することができ、その必要条件は、観察する諸事实现象の「体系化」である。「学」についていえば、昔「学」は「形氣道德」（すなわち形而上の学と形而下の学）に分けられ、名学（論理学）は哲学の分支として形而下の学に属していた。しかしながら、近代以降は形而下の学の原則（即ち実測、会通、試験）は形而上の学にも広く受け入れられたので、「形氣道德」はすべて「科学」となった。その中でも特に帰納、演繹等の推論方法を研究する名学（論理学）を諸学を統轄する学と考えていた。嚴復は、中国の伝統的な旧学問は「観察を行う術もなければ」、「実証しようとする努力もない」もので<sup>(68)</sup>、それが為に「国民の智力が発達せず、国家も弱っている」と指摘し<sup>(69)</sup>、したがって、物理や化学、動物、植物、天文、地質、生理、心理等の学科を早急に導入する必要があると考えた。帰納法を基礎としたこれらの「物理科学」は、「民生」に利するだけでなく、「民智」にも益する。斬新な、体系が整然としている「科学」は、古い世界を変えるものであり、また中国を救う唯一の道でもある。これこそが嚴復が「科学」、特に「名学」「物理科学」を推奨した理由である。

訳語の面において、嚴復は『原富』の中で「一科之学」という意味で初めて「科学」を使った。これは当時の中国社会で比較的一般的な理解でもあった。異なるのは、嚴復は「科学」に科学の科学たる概念を注入したことである。しかし、指摘すべきことは、嚴復は最後まで「学」を用いて人類の知識、学問体系を言明する努力を放棄しなかったことである。例えば、1909年から嚴復は清政府の学部審定名詞館の責任者を務め、3万語近い学術用語の審査を担当した。Scienceについては、本委員会が選定した標準訳語（即ち教育部審定語）は「学」である。二番目にランクした「科学」は、広く使用される新語として中国社会に紹介したにすぎなかった。嚴復ら審査委員は「科学」に対して保留の態度を示していたのである<sup>(70)</sup>。

論者の中には、嚴復の著作の中で「格致」が「科学」に取って代わられる現象が生じたと指摘した人がいる<sup>(71)</sup>。これはもちろん、中国語の語彙体系の近代化と関係があり、言語社会が「格致」ではなく「科学」をscienceの訳語に選んだためである。但し不可解なことに、嚴復はこの重大な「事件」に対して何も述べていなかったことである。

上述の分析から、嚴復本人はSCIENCEが指すところの意味内容、SCIENCEを実践するのに守らなければならない方法、SCIENCEの学術用語の特徴、東西の学

問の本質的な相違や伝統社会における「学」「術」に対する態度などについて、真剣に思索した。しかしながら当時、嚴復の「難解な」(或いはそうならざるを得なかった<sup>(72)</sup>)言説から、科学の神髄を理解できた中国人は一体どれほどいたろうか?その後、「賽先生(サイエンス)」と高らかに叫ぶ五四運動の旗手たちが、科学思想の普及を推し進めると同時に「科学万能」の濫觴を開いた。「科学」は嚴復の「公家之用最大(則ち“鍊心製事”という自然法則の認識)」という初志とは異なる道を歩むことになった。それが中国近代史の文脈においての得失が如何なるものかは、もはや翻訳史(訳語史を含む)が研究する内容ではないようである。

後記：本文初稿は2008年10月25日、関西大学文化交渉学教育研究拠点主催の国際シンポジウム：「西学東漸と東アジアにおける近代学術の形成」で発表した。このたび稿を定めるにあたり、陳力衛教授、王揚宗教授に拙稿を通読いただき、貴重なご意見を賜った。また、資料収集等の面で孫青さん、韓一瑾さんにご協力を頂いた。併せてお礼を申し上げる。本稿の中国語訳は『翻訳史研究』(第一輯、2011、114-137頁)に掲載されている。

〔注〕

- (1) 沈国威「一名之立旬月踟躕之前之後——嚴訳與新国語的呼喚」、『東アジア文化交渉研究』、創刊号(2008)、311-335頁。
- (2) 嚴復著、王栻編、『嚴復集』、北京：中華書局1986年、第3冊、518頁。
- (3) 嚴復著、王栻編、『嚴復集』、第3冊、519頁。
- (4) 英文大文字は概念を表し、小文字はその語を表す。
- (5) 本論文に用いる嚴復の著書、訳書は以下の通りである。嚴復著、王栻編：『嚴復集』、全5冊、中華書局、1986年；嚴訳名著叢刊『天演論』、『原富』、『穆勒名学』、商務印書館1981年版。
- (6) 宇田川榕庵『植学啓原・植物学』、東京：恒和出版、1980年、15頁。
- (7) 大久保利謙編『西周全集』、東京：宗高書房、1981年、第4巻、41-69頁。西周はさらに「学」と「術」の種類：pure science, applied science; mechanical art, liberal art, fine art, ……等について紹介したが、ここでは深入りしないことにする。
- (8) 山室信一、中野目徹注釈：『明六雑誌』、東京：岩波書店2009年、中冊、202~205頁。文中の英語は日本語原文中の音訳ルビより復元したもの。
- (9) 『明六雑誌』第22号、明治7年12月刊(1874.12.19)、山室信一、中野目徹注釈『明六雑誌』、中冊、236頁。ゴシック体は筆者による。
- (10) 同上、237頁。樊洪業「從“格致”到“科学”」、『自然弁証法通訊』、第10巻第3期(1988)、39-50頁も参照。
- (11) 『百学連環』はまず「普通学」と「殊別学」に分け、その下でそれぞれが歴史(地理学、文章学、数学)；心理上学(神理学、哲学、政事学、制産学、計志学)、物理上学(格物学、天文学、化学、造化史)を統轄している。
- (12) 鈴木修次『日本漢語と中国』、中央公論社、1981年、61-94頁。鈴木は第2章でSCIENCEの概

念の伝来と訳語の誕生について詳細に論じた。日本の明治初期にはまだ「科学之学」の意義の「科学」の例がある、例えば、「然レドモ科学ハ空文無益ニ成行モノ故試官ヨク其人ノ正邪ト実行トニ注意スベシ。」明治二年（1869）四月『公議所日志』八下。惣郷正明：『明治のこゝろ辞典』、東京：東京堂出版、1986を参照。

- (13) 飛田良文：『明治生まれの日本語』、京都市：淡交社、2002年、205頁。
- (14) 中村正直訳：『西学一斑』、『明六雑誌』第10号、明治七年六月刊行（1874年6月28日）。山室信一、中野日徹注釈：『明六雑誌』、上冊、341頁。これは訳文ではあるが、中村は欧州の学術の歴史的展開とその背景について、自分なりに説明を加えた。
- (15) 『明六雑誌』第16号、明治七年九月刊行（1874年9月22日）、同上、中冊、87頁。
- (16) 訳語の誕生は概念体系上の要因以外に、言語形式、即ち適切な語形（学術用語の場合は二音節）の要請も作用すると思われる。
- (17) 大久保利謙編：『西周全集』（西周記念会、1960）、572頁。辻哲夫：『日本の科学思想』、東京：中公新書、1973年、178頁。
- (18) 中村正直（訳）：『史学』第一編上、明治十二年（1879）。原著はG. G. ZerffのThe Science of History。本書は日本側の求めに応じて執筆されたもので、日本の実証主義史学の成立に対して重要な役割を果たした。加藤周一他（編）『日本近代思想大系13歴史認識』（東京：岩波書店、1991）、260頁。引用は、飛田良文『明治生まれの日本語』、206頁による。
- (19) 日本語の「科学的」はscientificの訳語。
- (20) いわゆる「科学的」とは、実証的な方法論の他に、論理的に結論を導き出す論証法も含まれる。
- (21) 飛田良文『明治生まれの日本語』、206-210頁。
- (22) 辻哲夫『日本の科学思想』、179-180頁。
- (23) 樊洪業「從“格致”到“科学”」、40頁。
- (24) 徐光啓「刻『幾何原本』序」、『幾何原本』（1607）。『天学初函』第4冊、台北：学生書局1965年版。
- (25) 徐光啓「『泰西水法』序」、『泰西水法』（1612）。『天学初函』第3冊、台北：学生書局1965年版。
- (26) 樊洪業「從“格致”到“科学”」、44-45頁。
- (27) 日本へ留学した学生が編纂した学術用語集『新爾雅』（1903）の「科学」の定義は、世界の現象を研究し、系統的な知識を与えるもので、名称を科学という。汪宝榮・葉瀾編『新爾雅』、上海：国学社、1903年。
- (28) 比較的早期の研究には、袁翰青「科学、技術二詞遡源」、『北京晚報』、1985年9月19日、樊洪業「從“格致”到“科学”」がある。特に樊の文章は比較的大きな紙幅をさき、格致から科学への転換問題を深く探究している。最近金観涛、劉青峰の研究：『觀念史研究：中国現代重要政治術語的形成』（香港：香港中文大学出版社2008）がある。本書第12章では、コーパスの統計分析手法を運用し、中国近代言語環境の中の「格致」「科学」の盛衰と觀念史上のいくつかの問題を論証した。両者いずれも筆者に深い啓発を与えた。このほか、艾爾曼「從前現代的格致学到現代的科学」（『中国學術』2000年第2期（2000）、インターネット版）、朱建發「最早引進「科学」一詞的中国人弁析」（『吉首大学学报（社会科学版）』、2005年2期59-61頁）、周程「究竟誰在中國最先使用了「科学」一詞？」（『自然弁証法通訊』第31卷總182期（2009年4月）、93-98頁）、張帆「從“格致”到“科学”：晚清學術体系的過渡與別稱（1895-1905年）」（『學術研究』2009年第12期（2009）、102-114頁）などは「科学」について考察した。
- (29) 沈国威「康有為與日本書目志」、『或問』第5期（2003）、51-69頁参照。
- (30) 朱建發「最早引進「科学」一詞的中国人弁析」。周程は、唐廷枢は中国近代で最初に「科学」

を使用した人物であると考えている。しかし、文中に示す唐廷枢の例「教科学」と「教科書」の構造と同じく、「教科+学」と分析すべきである。

- (31) 格致学堂（訳）：『東洋史要』（上海：東文学社，1899）。本書の状況および訳語の問題については実藤惠秀（著）、譚汝謙、林啓彦（訳）：『中国人留学日本史』（北京：三連書店，1983）216頁；沈国威：『近代日中語彙交流史』（東京：笠間書院，1994）、222-268頁（改定新版2008年223-272頁）を参照。
- (32) 梁啓超「論太平洋之未来与日本国策」、『清議報』第13期、光緒二十五年三月、12-14頁。
- (33) 熊元鏗等撰『江西鄉試録』、『江西鄉試闈墨』、奎宿堂刊、1903年。張百熙、榮慶、張之洞『學務綱要』1903年9月、舒新城（編）：『近代中国教育史料』（北京：中華書局，1928）、8-30頁収録。
- (34) 嚴璩『侯官嚴先生年譜』、『嚴復集』、第5冊、1546頁。
- (35) 嚴璩『侯官嚴先生年譜』、『嚴復集』、第5冊、1547頁。
- (36) 曾紀沢『出使英法俄國日記』（長沙：岳麓書社、1985）、186頁。
- (37) 嚴復著、王栻編『嚴復集』、第1冊、1-5頁。
- (38) 同上、5-15頁。
- (39) 樊洪業「從“格致”到“科学”」、45-46頁。
- (40) 嚴復著、王栻編『嚴復集』、第1冊、40-54頁。
- (41) ハクスリー（著）、嚴復（訳）『天演論』、北京：商務印書館、1981年、44頁。
- (42) Thomas Henry Huxley, *Evolution and Ethics and other Essays* (New York: D. Appleton and company, 1902), p. 43. この段落の現代中国語訳は次の通りである。「倫理学家和政治哲学家的任務，我認為應該是用其他科学工作中所採用的同樣的觀察、實驗和推論的方法，去確定最有助于達到此目的的行動方針。」ハクスリー（著）、『進化論与倫理学』翻譯チーム（訳）：『進化論与倫理学』、北京：科学出版社、1973、30頁。但し文中の「推論」は「検証」即ち嚴復の「試験」と訳すべきと思われる。
- (43) 嚴復著、王栻編『嚴復集』、第1冊、92-95頁。
- (44) 演説であるからには、聞いて分かったかどうかという問題がある。
- (45) 原著はLondon William Pickering 1995年版 (<http://www.archive.org>) を使用した。訳著『原富』は商務印書館1981年版（アダム・スミス[著]、嚴復[訳]：『原富』、北京：商務印書館、1981）。同時に謝祖鈞訳の『国富論』（アダム・スミス[著]、謝祖鈞[訳]：『国富論』、北京：新世界出版社，2008）を参照した。
- (46) 本書はscienceを計43回使用している。
- (47) 現代中国語の中で、「科学」は常に「技術」と連用され、「一門科学」という言い方もある。しかし、形態変化手段のない中国語は、「科学」という文字の排列でscience, scientificという異なる意義を表現する。
- (48) 「就其性質來說，是專橫和任意的。行使這個權利（ママ。引用者）的本人既沒有聽教師的課，也許還不懂教師所講授的那門学科。他們很少有力量做出正確的判斷。」謝祖鈞他訳、中国語版719頁。
- (49) 「如果每个学院里講授所有文学和科学的導師或教師不是学生自願選擇的，而是由院長指定的；……」謝祖鈞他訳720頁。
- (50) 「而在大学里，青年人既沒有學到大学所應該教導他們的科学，也經常找不到可以學習這些科学的適當手段。」謝祖鈞他訳721頁。
- (51) 「通常在大学里所傳授的那部分教育，也許可以說都教得不很好。但是如果沒有這些大学，那他

們就会全然接受不到那些教育，那么不論個人和社会都将由于缺乏這些重要部分的教育而蒙受極大的損失。」謝祖鈞他訳721頁。

- (52) 「不同的作者对自然哲学和道德哲学提出了不同的体系。」謝祖鈞他訳725頁。
- (53) 「而邏輯学，或者說關於好壞的推理的普遍原則的科学必然就在这類细致的觀察中產生了。雖然它的產生晚于物理学和倫理学，這門科学一經產生就在大部分古代哲学学校里都開設了，而且先于物理学和倫理学，……」謝祖鈞他訳725頁。
- (54) 原著は、New York Harper & Brothers, Publishers 1848版 (<http://www.archive.org>)；訳書はJ. S. ミル著、嚴復訳『穆勒名学』、北京：商務印書館、1981；日本語版は、大関将一訳『倫理学体系』、東京：春秋社、1949。
- (55) 厳格な対訳は「邏輯学會常常被称作推理之術 (the Art of Reasoning)。在我国有教养的人們的評価中，邏輯学的声望極為低落。為了恢復斯学往日的輝煌比任何人都竭尽全力的某著述家。他对上述定義做了若干修正，將邏輯学界定為既是推理之学 (Science of Reasoning)，又是推理之術。所謂推理之学的意思是：邏輯学是对我們推理時的心理過程所進行的分析；而所謂推理之術的意思是：邏輯学是一組規則，它是分析賴以存在的基礎，并保證推理過程的正確性。上述定義的修正其正当性是不容置く疑的。对于心理過程本身的正確理解與心理過程所依拠的諸種条件，以及構成推理的步驟等都以這一規則体系為基礎，正是依拠這些規則，正確的分析過程才得以建立。術必然以知識為前提。術只要不是处于原始狀態，都以科学的知識為前提。如果說并非所有的術都需冠以“学”的名号，那是因為某一种“術”常常需要以若干種“学”為基礎的緣故。左右我們实践活動的条件是如此繁複，完成一事每每需要了解衆多事物的性質、特徵。」となるだろう。筆者。
- (56) 四字成語としての「不学無術」の意味は「無学無能」であるが、嚴復は、学がなければ、術もあり得ないと掛けている。
- (57) 中国の伝統的な「学」「術」の区別および近代西洋の學術との關係等の問題については、羅志田「走向国学與史学的“賽先生”」、『近代史研究』、2000年第3期、59-94頁を参照。
- (58) J. S. ミル著、嚴復訳『穆勒名学』、3頁。以下、頁数は引用部分の後に付ける。
- (59) 嚴復は「哲学」については満足ではなく、「理学其西文本名謂之出形气学，與格物諸形气学為对，故亦翻神学、智学、愛智学，日本人謂之哲学。顧晚近科学独有愛智以名其全，而一切性靈之学則歸于心学，哲学之名似尚未安也。」(ジョン・スチュワート・ミル [著]、嚴復 [訳]：『穆勒名学』12頁)。嚴復の訳語制定については沈国威：『近代中日詞彙交流研究』(北京：中華書局，2010)，第2編第3章；嚴復の訳詞と日本語の關係については、朱京偉：「嚴復訳著中的新造詞和日語借詞」(馮天瑜編『人文論叢』、2008年卷、北京：中国社会科学出版社、2009年、50-81頁)を参照。
- (60) 『原富』『穆勒名学』中の「一科学」「二科学」の用法はこのような状況を反映した。真の複合語はその内部構成要素は外部から修飾を受けない、例えば「很大海」「很旧居」はいずれも非文である。
- (61) 嚴復の国語のあり方についての主張を別稿に譲る。
- (62) 時間は『京師大学堂訳書局章程』(1903年8月29-31日『大公報』)の前のはずである。
- (63) 嚴復：『京師大学堂訳書局章程』、『嚴復集』、第1冊、129-130頁。
- (64) 同上、281頁。
- (65) 同上、第5冊、1241-1316頁。
- (66) 「方今欧說東漸，上自政法，下逮虫魚，言教育者皆以必用国文為不刊之宗旨。」嚴復「嚴復致伍光建函」、『嚴復集』、第3冊、586頁。

- (67) 嚴復は『与『外交報』主人書』の中でこの問題を深く論じた。嚴復はさらに「迨夫廿年以往，所学稍富，訳才漸多，而後可議以中文授諸科学，而分置各国之言語为専科，蓋其事誠至難，非寛为程期，不能致也。」（嚴復著、王栻編『嚴復集』、第2冊、562頁）とまで言った。
- (68) 『嚴復集』、第2冊、283頁。
- (69) 『嚴復集』、第2冊、285頁。
- (70) 沈国威：「官話（1916）及其訳詞—以“新詞”“部定詞”為中心」、『アジア文化交流研究』2008年第3号（2008）、113-129頁。
- (71) 樊洪業「從“格致”到“科学”」及び張帆「從“格致”到“科学”：晚清學術体系的過渡與別扱（1895-1905年）」。
- (72) 嚴復が言語の面で受けた制限については、沈国威：『近代中日詞彙交流研究』、第2編第3章を参照。

〔引用書目〕

- 艾爾曼：「從前現代的格致学到現代的科学」（『中国學術』2000年第2期（2000），網絡版）
- 樊洪業：「從“格致”到“科学”，『自然弁証法通訊』，第10卷第3期（1988），頁39-50。
- 格致学堂（訳）：『東洋史要』（上海：東文学社，1899）。
- 赫胥黎（著）、『進化論與倫理学』翻譯組（訳）：『進化論與倫理学』（北京：科学出版社，1973）。
- 赫胥黎（著）、嚴復（訳）：『天演論』（北京：商務印書館：新華書店北京發行所，1981）。
- 金觀濤、劉青峰の研究：『觀念史研究：中国現代重要政治術語の形成』（香港：香港中文大学出版社，2008）。
- 梁啓超：「論太平洋之未来與日本国策」、『清議報』第13期、光緒二十五年三月、頁12-14。
- 羅志田：「走向国学與史學的“賽先生”」、『近代史研究』2000年第3期（2000）、頁59-94。
- 沈国威：『近代日中語彙交流史』（東京：笠間書院，1994）、頁222-268；（改訂新版2008年）頁223-272。
- 沈国威：「康有為與日本書目志」、『或問』第5期（2003）、頁51-68。
- 沈国威：「一名之立旬月踟躕之前之後——嚴訳與新国語の呼喚」、『東アジア文化交渉研究』創刊号（2008年）、頁311-335。
- 沈国威：「『官話』（1916）及其訳詞——以“新詞”“部定詞”為中心」、『アジア文化交流研究』第3号（2008年）、頁113-129。
- 沈国威：『近代中日詞彙交流研究』（北京：中華書局，2010）。
- 汪宝榮・叶瀾：『新爾雅』（上海：国学社，1903）。
- 徐光啓：「刻『幾何原本』序」、『幾何原本』（1607。『天学初函』第4冊，台北：学生書局1965年版）。
- 徐光啓：「『泰西水法』序」、『泰西水法』（1612。『天学初函』第3冊，台北：学生書局1965年版）。
- 亜当・斯密（著）、嚴復（訳）：『原富』（北京：商務印書館，1981）。
- 亜当・斯密（著）、謝祖均（訳）：『国富論』（北京：新世界出版社，2008）。
- 嚴復：『京師大学堂訳書局章程』，嚴復（著）、王栻（編）：『嚴復集』（北京：中華書局，1986）『嚴復集』，第1冊。
- 嚴復（著）、王栻（編）：『嚴復集』全5冊（北京：中華書局，1986）。
- 嚴復：「嚴復致伍光建函」，嚴復（著）、王栻（編）：『嚴復集』（北京：中華書局，1986）『嚴復集』，第3冊，頁586。
- 嚴璩：『侯官嚴先生年譜』，『嚴復集』，第5冊。
- 袁翰青：「科学、技術兩詞溯源」，『北京晚報』，1985年9月19日。

- 約翰・穆勒（著）、嚴復（訳）：『穆勒名学』（北京：商務印書館：新華書店北京發行所發行，1981）。  
曾紀沢：『出使英法俄国日記』（長沙：岳麓書社，1985）。  
張百熙、榮慶、張之洞：『學務綱要』1903年9月，舒新城（編）：『近代中国教育史料』（北京：中華書局，1928），頁8-30。  
周程：「究竟誰在中國最先使用了「科学」一詞？」，『自然弁証法通訊』第31卷總182期（2009年4月），頁93-98。  
朱發建：「最早引進「科学」一詞的中國人分析」，『吉首大學學報（社會科學版）』第26卷第2期（2005年4月），頁59-61。  
朱京偉：「嚴復譯著中的新造詞和日語借詞」，收馮天瑜（編）：『人文論叢』2008年卷（北京：中國社會科學出版社，2009年），頁50-81。  
Huxley, Thomas Henry, *Evolution and Ethics and other Essays* (New York: D. Appleton and company, 1902).  
Mill, John Stuart, *A System of Logic, Ratiocinative and Inductive* (New York Harper & Brothers, Publishers 1848 edition), <http://www.archive.org>.  
Smith, Adam, *An inquiry into the nature and causes of the wealth of nations* (London William Pickering 1995 edition), <http://www.archive.org>.  
飛田良文：『明治生まれの日本語』（京都市：淡交社，2002）。  
加藤周一等（編）：『日本近代思想大系13歴史認識』（東京：岩波書店，1991）。  
中村正直（訳）：『西学一斑』，『明六雜誌』第10号，明治七年六月刊行（1874年6月28日），山室信一、中野目徹（校注）：『明六雜誌』（東京：岩波書店：2009年），上册。  
中村正直（訳）：『史学』第一編上，明治十二年（1879），飛田良文：『明治生まれの日本語』より引用。  
大久保利謙（編）：『西周全集』（西周記念会，1960）。辻哲夫『日本の科学思想』，（東京：中公新書，1973）参照。  
大久保利謙（編）：『西周全集』（東京：宗高書房，1981），第4卷。  
大関将一（訳）：『倫理学体系』（東京：春秋社，1949）。  
実藤恵秀（著）、譚汝謙、林啓彦（訳）：『中国人留学日本史』（北京：三聯書店，1983）。  
惣郷正明（編）：『明治のことば辞典』（東京：東京堂出版，1986）。  
鈴木修次：『日本漢語と中国』（東京：中央公論社，1981）。  
辻哲夫：『日本の科学思想』（東京：中公新書，1973）。  
宇田川榕庵：『植学啓原/植物学』（東京：恒和出版，1980）。  
山室信一、中野目徹（校注）：『明六雜誌』（東京：岩波書店：2009年）。  
『明六雜誌』第16号，明治七年九月刊行（1874年9月22日），山室信一、中野目徹（校注）：『明六雜誌』（東京：岩波書店：2009年），中册。  
『明六雜誌』第22号，明治七年十二月刊行（1874年12月19日），收山室信一、中野目徹（校注）：『明六雜誌』（東京：岩波書店：2009年），中册。







